

瀬峰町文化財調査報告書 第5集

がんげつ遺跡

第3次発掘調査報告書

宮城県北部における奈良時代の
遺跡、及びその周辺地域の調査

昭和60年3月

瀬峰町教育委員会

発刊の辞

暖い光とともにようやく胎動し始めた早春の風景が、今年は昭和60年の新しい時代を迎えることと相俟って、特に感慨深いものがあります。

私たちが住む瀬峰町では恵み豊かな自然の中に四季折々の美しい景色を存分に楽しむことができますが、そのような環境の中に多くの文化財が守られ、伝えられてまいりました。とりわけ、自然環境の保全と密接な関係を有する埋蔵文化財は町内に数多く残されており、歴史の中に埋没しかけたかのように見える先人の足あとを鮮やかに甦らせてくれます。

瀬峰町では現在までに岩石I遺跡、長者原II遺跡、大境山遺跡、下藤沢II遺跡について発掘調査を実施してまいりましたが、なかでも岩石I遺跡は昭和50年度の第1次調査、52年度の第2次調査と継続的な調査が行なわれた唯一の遺跡でもあります。今回、本書に収録したのは昭和56年7月、岩石I遺跡の北辺を貫く町道寺沢線拡幅工事に伴なって実施された第3次調査の報告で、既刊の第1次、第2次調査報告書を合わせてお読み頂ければ、一連の調査で出土した多種多様の遺物や遺構などから、古代の人々の逞しい息吹が直に伝わってくるものと確信いたします。

今回の発掘調査を実施するにあたって、全面的な協力を賜わった宮城県築館農林事務所、佐々貞土建に深く感謝申し上げますとともに、調査から報告書の作成にわたって終始、懇切なご指導をくださった宮城県教育庁文化財保護課の方々、名古屋大学教授檜崎彰一氏、日本考古学協会員佐藤信行氏、瀬峰町文化財保護委員佐々木尚見氏に心から御礼申し上げる次第です。終わりに、本書が町民の方々をはじめとして県内外の方々にも広く読まれ、暖いご指導をお寄せ頂きますことを祈念し、発刊の辞とします。

昭和60年3月

瀬峰町長 後藤 賢次

発刊によせて

冬の間、美しい姿を見せてくれた白鳥もいつの間にか北に旅立ち、野山も日々春めいてまいりました。

瀬峰町教育委員会では、從来から社会教育の一環として文化財の保護に力を入れてきました。豊かで住みよいふる里づくりのためには、その歴史を正しく理解し、後世に伝えていかなければならないからです。本書で扱う岩石Ⅰ遺跡は上巣地区の丘陵上に展開する広大な遺跡で、以前から瀬峰町の古代を解明する上で重要な遺跡として知られていましたが、今からちょうど10年前の昭和50年、当町における数々の発掘調査はこの遺跡から着手されました。調査は瀬峰郷土研究会の方々が中心となって実施したものですが、その熱意がかなって平安時代初期の住居跡が1棟、姿を現わしました。昭和52年、これに続く第2次調査が行なわれ、3棟の平安時代住居跡が検出されました。解明の歩がさらに進められたのです。

今回、報告するのは昭和56年に行なわれた第3次調査の結果です。岩石Ⅰ遺跡のある丘陵尾根部分を走る町道寺沢線の拡幅工事に基づいて実施されたもので、奈良時代に属する1辻7m余の大型住居跡が1棟発見されました。この住居跡は道路によって既にその半分が壊されていましたが、このような継続調査を重ねてゆけば、近い将来、必ずその核心に迫ることが可能と思われます。

調査と本書の作成にあたっては、宮城県教育庁文化財保護課、宮城県築館農林事務所、佐々貞土建等の諸機関から種々ご高配を賜わりました。また、名古屋大学榎崎彰一氏からは綠釉陶器を鑑定して頂き、日本考古学協会員佐藤信行氏、瀬峰町文化財保護委員佐々木尚見氏をはじめとする多くの方々からは暖かいご指導、ご協力を頂きました。ここに関係各位に対し慎しんで敬意を表するとともに、今後、益々皆様のご指導、ご協力を賜りますことをお願い申し上げます。

昭和60年3月

瀬峰町教育委員会 教育長 手島正夫

例　　言

1. 本書は町道寺沢線道路拡幅工事に伴なう緊急発掘調査報告書である。
2. 〔遺跡名〕 岩石 I 遺跡(遺跡登載番号: 46017)
〔所在地〕 宮城県栗原郡瀬峰町大里字薗岩石12-3
〔調査対象面積〕 441m²
〔調査面積〕 62m²
〔調査期間〕 昭和56年7月20日～昭和56年7月24日
〔調査担当〕 瀬峰町教育委員会 教育長 手島正大
3. 今回の発掘調査を実施するにあたり、次の機関や方々から指導、協力を賜わった。
宮城県教育庁文化財保護課
宮城県美術館農林事務所
有限会社 佐々木土建
日本考古学協会員 佐藤信行
瀬峰町文化財保護委員 佐々木尚見
4. 本書を作成するにあたり、次の機関や方々から指導、協力を得た。
名古屋大学教授 橋崎彰一
宮城県教育庁文化財保護課調査第2係長 藤田光彦
日本考古学協会員 佐藤信行
瀬峰町文化財保護委員 佐々木尚見
瀬峰町公民館長 佐々木徳雄
5. 土層や土器の色調の表記については『新版標準上色版』四版(小山・竹原: 1973.1、日本色研事業株式会社)に準拠し、土性区分は国際土壤学会法の基準を参考にした。
6. 今回の第3次発掘調査で得られた資料は、第1次、第2次発掘調査資料とともに瀬峰町教育委員会で保管している。
7. 本書の執筆、編集は瀬峰町教育委員会社会教育主事: 阿部正光、東北学院大学文学部史学科卒業生: 赤沢靖章が行なった。また、原稿の浄書や図面等の整理は東北学院大学史学科学生: 佐藤敏幸が行なった。

目 次

発刊の辞	
発刊によせて	
例言	
目次	
I. 調査に至る経過	1
II. 遺跡の位置と地理的・歴史的環境	1
1. 遺跡の位置と地理的環境	1
2. 遺跡の歴史的環境	2
III. 調査の方法と経過	10
IV. 基本層序	11
V. 検出された遺構と出土遺物	11
1. 1号住居跡と出土遺物	11
2. I層(表土)出土遺物	15
VI. まとめ—遺構と遺物の検討	16
1. 遺 物	16
2. 遺 構	18
VII. 付編—岩石I遺跡、及び周辺の遺跡から発見された遺物	19
図 版	28

I. 調査に至る経過

岩石I遺跡は瀬峰町に所在する遺跡の中でも、最も代表的な遺跡として知られている。その理由としては昭和50年5月、瀬峰町において初めての発掘調査が本遺跡で行なわれ、当町初見の平安時代竪穴住居跡が検出されたからである。さらに、当町では奈良・平安時代に至り、遺跡の数が急激に増加するが、本遺跡からはこの時期の住居跡が広大な面積の丘陵上に広く分布することが知られており、この現象を端的に示す遺跡として、また調査の進展によってはその背景を解く鍵を本遺跡が秘めていると考えられているからである。

本遺跡は昭和40年代初め頃には既に知られていた(横要照:1966.3)が、先に触れたように本格的な発掘調査がなされたのは昭和50年に至ってからである。調査の結果、増改築を伴なう住居跡が1棟、さらに多数の土師器、須恵器、鉄製品等が出土した(三宅・佐藤ほか:1977.3)。

この成果を踏まえ、昭和52年、第2次調査が実施され、住居跡3棟、掘立柱建物跡1棟、小竪穴遺構2基、ならびに土師器、須恵器、縁釉陶器、鉄製品、植物種子遺存体等、多種にわたる遺物が出土し(佐藤信行ほか:1980.3)、本遺跡の重要性がさらに強調されるに至った。

昭和56年、宮城県建築農林事務所から本遺跡の北緯、丘陵頂部を東西に走る町道寺沢線道路拡幅工事計画の遮断を受けた瀬峰町教育委員会では、その取り扱いについて再三、協議を重ねた。その結果、工事計画の変更は困難との結論に至り、同農林事務所、および(有)佐々貞士建の協力を得て、昭和56年7月20日から7月24日にかけて発掘調査を実施した。

註1：碗の体部破片資料で、第2次発掘調査における第2号住居跡、第3号住居跡の埴籠土からそれぞれ1点ずつ出土した。名古屋大学教授檜崎彰一氏からは10世紀前半、猿投窓製品であるとのご教示を得た。

細片であるため、第2次発掘調査の報告書では註記だけに止めているが、今回、報告者である佐藤信行氏の承諾を得て、その写真を図版7-7(第2号住居跡第3層出土資料)、図版7-8(第3号住居跡第2層出土資料)に収録した。

II. 遺跡の位置と地理的・歴史的環境

1. 遺跡の位置と地理的環境

宮城県の西北部、栗原郡の東南端に所在する瀬峰町は宮城県西部を南北に走る奥羽山脈と、岩手県から宮城県北東部にかけてのびる北上山地とにはさまれた仙北平野低地帯のうち、北上川下流域右岸の一画に位置している。ここは奥羽山脈から次第に標高を減じながら南東方向に連なる派生低丘陵のほぼ末端部分に当たるため、周辺には県北湖沼地帯として知られる伊豆沼、

内沼、長沼、蕪栗沼が群在し、とりわけ蕪栗沼は当町を貫流する瀬峰川、小山田川、萱刈川の遊水地として当町の東南部に隣接している。

岩石 I 遺跡は瀬峰町を東西に横切る緩やかで低平な4つの丘陵中、町北部を東流する瀬峰川と町中央部を東流する小山田川とにはさまれた標高50m前後の低丘陵上に位置し、県道田尻・瀬峰線中、通称“大境バイパス”的ほほ中間から西に分岐する町道寺沢線の南斜面、瀬峰町大里字富岩石地内に広く展開する遺跡である。この附近の地形は、小山田川北岸にあたる上富行政区要塞地区から北に向ってのびるY字状の開析小谷によって、複雑に入り組んだ地形を呈している。

環境については東北本線瀬峰駅の西北西約2kmにあるにもかかわらず、比較的自然が保全されており、一部に牧草地、水田、畠地等を有しているものの、その大半はクリやクヌギ、ナラなどが繁茂する雜木林、松や杉などの植樹林で占められている。



第1図 瀬峰町位置図

2. 遺跡の歴史的環境

本項においては、瀬峰町内から発見された遺構や遺物を中心に記述したが、資料が不十分であったり、より広い地域で考えなくてはならない時代については適宜、近接地域の資料も用いた。なお、引用、参考文献については、従来までの町内の成果が収録されている「宮城県遺跡地名表」(宮城県教育委員会:1981.2)を基本としたが、それに収録されていない成果は文中に文献や註を付し、説明を加えてある。

旧石器時代

旧石器時代の遺跡は、現在のところ町内からは発見されていない。しかし、当町に横たわる丘陵上には火山灰の厚い堆積が認められ、かつ、近年注目を集めている宮城県北部旧石器時代遺跡群からも近い距離にあるところから、今後、当町でも旧石器時代の遺跡が発見される可能性が強い。ちなみに岩石 I 遺跡はスクレーバーと彫刻刀形石器が発見されている田尻町六月坂遺跡(岡村・鎌田:1980.3)から6km、発掘調査によって前期旧石器の存在が認められた岩出山町座敷乱木遺跡(石器文化談話会:1983.4)、古川市馬場塙 A 遺跡(石器文化談話会:1984.5)から10数kmの距離に位置している。

縄文時代

瀬峰町で縄文時代の遺物を出土する遺跡は18ヶ所を数えるが、このうち年代が分かる縄文土器を出土する遺跡は合計6ヶ所にすぎない。年代的に列記すると、早期後葉から前期前葉の織維土器を出土する遺跡としては大境山遺跡(阿部・赤沢：1983.3)、前期大木4式を出土する遺跡としては筒ヶ崎遺跡(佐藤信行：1984.3)、さらに大木6式は大境山遺跡、空堤遺跡、岩石I遺跡から認められている。中期大木8a式は岩石I遺跡、大木8b式は大境山遺跡、大木10式は^{註1}岩石II遺跡から出土している。後期では門前式が大境山遺跡、南境式が大鷗谷北向遺跡から出土している。

これらの遺跡はいずれも丘陵上に位置するが、現在までのところ明確な遺構の検出はなされていない。また、土器の出土の仕方も極めて散発的で、しかも細破片が少量しか認められないという点で共通している。ちなみに、3万余m²にも及ぶ大規模調査が行なわれた大境山遺跡ではこの現象が顕著に認められ、古墳時代以降の遺構の検出例は多かったにもかかわらず、縄文時代の遺構は全くない上、出土七器全体に占める縄文土器の割合も驚くほど少なく、摩滅した細破片が数点見い出されただけであった。以上、今後の調査の進展によって遺跡の数は若干増えると思われるが、今までのところ、当町域内における縄文時代の遺跡のあり方は極めて貧弱であると言わなければならない。

次にこのような状況が何に起因するのか考えてみたい。西方から蕪栗沼に向ってのびる低丘陵突端部に所在する鼻穴遺跡(佐藤信行：1984.3)では、土器は採集されていないものの、60数点に及ぶ石鏃と数点の石匙、石錐が採集されている。また、先に触れた大境山遺跡では極く少量の縄文土器と、石鏃をはじめとする石器が調査区全域にわたって多数出土している。このほか、町内からは石鏃などの石器だけが採集されている遺跡が数ヶ所知られている。

他方、当町の東側に広がる旧蕪栗沼沿岸には南方町長者原貝塚(阿部・遊佐：1978.3)、田尻町中沢目貝塚(須藤隆：1984.3)、涌谷町長根貝塚(伊東信雄ほか：1969.3)などの貝塚を伴なう諸遺跡が当町域から極く近い距離に群在している。以上のことを考え合わせると、縄文時代において当町域は概ね、蕪栗沼沿岸諸遺跡の後背地としてその生活領域内に包含され、活動の拠点となる聚落の形成はなされず、むしろ、これら諸遺跡の生産活動を補完する狩猟、採集の場として機能していたと推定することができる。なお、このことについては今後、より詳細な検討を必要とするが、現段階における一指針として示しておきたい。

弥生時代

町内における弥生時代の遺跡は未だ調査が不十分なこともあって、瀬峰川と小山田川に挟ま

れた丘陵地域に3遺跡認められているに過ぎない。岩石I遺跡ではその最西端、丘陵頂部において少量の天王山式系土器が採集され、寺山遺跡からは天王山式系土器よりも年代的に新しい弥生時代後期最終段階と思われる1個体の土器とアメリカ式石鏃が採集されている。^{註2}また、発掘調査が行なわれた大境山遺跡においては僅く少量の円田式と多量の天王山式系土器、それにアメリカ式石鏃をはじめとする石器が出土したもの、明確な遺構は全く検出することができなかった。

なお、縄文時代、多数の遺跡が形成された蕉葉沼沿岸でも遺跡の数や規模は減少し、弥生土器が断片的に採集されているにすぎない。よって、当町域、および蕉葉沼沿岸地域における弥生時代の様相は、現段階では不明であると言わざるをえない。

古 墓 時 代

瀬峰町内で古墳時代の遺跡は、現在4ヶ所知られている。前期の遺跡としては、11基の住居跡が標高35mの丘陵尾根上からほぼ列状に近接して検出された大境山遺跡がある。いずれの住居跡も塙釜式期のもので、一边が4m以下、全体的に歪みの激しい方形、または長方形を呈するものが大部分である。遺物としては土師器の壺や高环、甕、壺、土製紡錘車、砥石、黒曜石製ラウンド・スクレーバーなどが出土している。泉谷遺跡からは、大境山遺跡と同様、塙釜式期の土師器高环、器台、それに黒曜石製スクレーバー(佐藤信行:1984.3)が採集されている。中期の遺跡としては荒町遺跡があげられる。ここからは南小泉式期の土師器高环が採集されている。後期の遺跡としては樂岡式でも新しい段階のものと思われる土師器甕、鉢、瓶を出土した三代遺跡(阿部正光:1983.3)が知られている。

以上の遺跡は、いずれも蕉葉沼に東流する小山田川沿いに発達した沖積低地両側の低丘陵上に位置しているものの、大境山遺跡の場合、小山田川沿いの沖積低地から離れた山合いの比較的標高の高い小丘陵上に所在するところから、対峙する丘陵間に展開する狭小な谷地において、極く小規模な水田経営が行なわれていたものと思われる。一方、泉谷遺跡、荒町遺跡、三代遺跡の場合、地形的には眼前に小山田川、または蕉葉沼を臨む低丘陵上に立地していることから、当時、小山田川の土砂運搬作用によって徐々に沖積地化しつつあった旧蕉葉沼の縁辺部において、水田経営が行なわれていたものと考えられる。

なお、これらの遺跡と近距離にある古墳時代の遺跡としては、高清水町東館遺跡、大寺遺跡があげられる。いずれも小山田川の上流、旧蕉葉沼に臨む丘陵突端部に位置するが、東館遺跡からは塙釜式期の住居跡と方形周溝塙がそれぞれ1基ずつ検出され(加藤道男:1980.3)、大寺遺跡からは塙釜式期と南小泉式期の土師器が出土している(佐藤信行:1975.3,1976.10、奥野義一:1976.1)。両遺跡とも同一丘陵上に近接するところから、本来的には同一の遺跡とも考えら

れるが、方形周溝墓の存在から少なくとも古墳時代前期には特定地域における中核的機能を果したものとも推定される。このように考えると同じく旧蘇我沼に注ぐ小山田川水系で、しかも近距離にある大境山遺跡、荒町遺跡、泉谷遺跡は東館遺跡や大寺遺跡と何らかの関連性を有するものと推定される。

ちなみに大寺遺跡からは北海道系の土器と考えられる北大式土器と気泡の多い乳白色の縞模様の入った黒曜石製ラウンド・スクレーバーが発見されているが、同様の黒曜石製ラウンド・スクレーバー^{註4}は大境山遺跡5号住居跡や袋沢遺跡からも採集されている。また、泉谷遺跡からも同様な特徴をもつ黒曜石製スクレーバーが発見されており、前述のような関連性は十分に考えられるところである。今後、本地域の沼沢や河川、丘陵などによる地理的条件に基づいた遺跡相互の関連についても、積極的に検討してゆかなければならない。

奈良・平安時代

近年、宮城県においては関東地方の鬼高式から真間式と思われる土師器壺の出土が相次ぎ、奈良時代に先行する時期について種々の論議がなされてきている。本遺跡周辺でも大境山遺跡、民生病院裏遺跡^{註5}から同系の遺物が発見されており、奈良・平安時代に急激な遺跡数の増加現象を考える上で、今後、注意してゆかなければならない問題である。

奈良・平安時代に属する遺跡は、当町域だけで48遺跡を数えるが、そのうち桃生田前遺跡を除いた全てが丘陵上に形成されている。現在までに発掘調査が実施された遺跡としては岩石I遺跡、長者原II遺跡、大境山遺跡、民生病院裏遺跡、下藤沢II遺跡^{註6}があげられる。各遺跡とも奈良時代から平安時代にかけての住居跡と多数の遺物が発見されており、当町だけでなく宮城県北部における当該期の集落跡を考える上で貴重な資料を提供している。とりわけ、多数の住居跡が検出された大境山遺跡の調査では、各住居が適度に散在するという現象が認められ、宮城県北部における集落形成の一形態、及びその生業について一定の見通しが得られている。

なお、町内には上記の遺跡の他にも水田や牧草地、建物や道路等の工事によって地表に露出したり、その一部が破壊された住居跡が多数知られており、今後、これらも踏まえて遺跡の急増化現象について具体的な分析を加える必要がある。

集落跡の調査の進展に比べ、墓制や生産に関係する遺跡についての調査は大きく立ち遅れている。墓制に関する遺跡としては須恵器壺の藏骨器が単独で出土した蒲盛遺跡（阿部・赤沢：1984.3）が知られている。製鉄に関する遺跡としては清水沢I遺跡、諏訪神社遺跡が可能性として考えられるが、未だその年代を特定するまで至っていない。廬跡や各種工房跡、畠、水田等に関する遺跡・遺構も現在までのところ未確認で、今後、基礎的なデータを蓄積する必要に迫られている。

瀬峰町内で中世の館跡と確実に認められるのは藤沢館跡、古館館跡、殿上館跡、小深沢殿上館跡、計4ヶ所である。いずれも蕪菜沼に流れる瀬峰川に面した丘陵上に位置し、自然地形を利用した土壘や空堀り、それに狭小な平場を有する単郭式の極く小規模なもので、藤沢館跡や古館館跡では平場内において井戸跡と思われる窪みも確認されている。

集落跡は未だ確認されていないが、中世の陶磁器が採集された遺跡は2ヶ所知られている。小山田川沿いの沖積低地に立地する下富前遺跡からは14世紀初め頃の龍泉窯青磁皿の口縁・体部破片が出土している(佐々木・阿部:1982.3)。同じく小山田川の南岸、丘陵上に展開する荒町遺跡からは14世紀初めの沈線と印花文が付された古瀬戸壺の肩部破片^{註7}、および16世紀代の瀬戸、または美濃と思われる灰釉皿の口縁・体部破片が出土している(佐藤信行:1976.12,1984.3)。

板碑については『栗原郡藤里村誌』(鈴木玄雄:1922.12)、「瀬峰町史」(瀬峰町史編纂委員会:1966.3)ではいずれも20数基の存在を報じているが、その所在が不明となるものが多く、現在のところ五輪堂山や虎溪寺などに14基確認されているに過ぎない。

墳墓、または信仰に関する遺跡としては経塚遺跡、諏訪原経塚、下藤沢II遺跡、王塚遺跡、四ツ塚遺跡等が知られている。いずれも単独、または複数の塚から構成されるが、銅製経筒が出土したといわれ、概ね平安時代末から中世と思われる経塚遺跡、江戸時代に一字一石経を埋納したと伝えられる諏訪原経塚、昭和57年度の発掘調査によって江戸時代後期の墓と判明した下藤沢II遺跡を除けば、町内に所在する多数の塚の性格や年代については、未だ不明であると言わざるを得ない。

註1:昭和55年度文化財バトロール事業によって発見された。

註2:昭和55年度文化財バトロール事業によって発見された。

註3:弥生土器は昭和49年3月、地権者青沼弘氏によって採集された。アメリカ式石錆は昭和46年度に実施された新幹線関係遺跡の分布調査の際、大鰐谷南向遺跡から採集された(宮城県教育委員会:1972.3)。同遺跡は現在の寺山遺跡と考えられている。

註4:昭和59年度文化財バトロール事業によって発見された。

註5:昭和56年7月、同遺跡地内の宅地造成事業の際、採集されたものである。

註6:昭和57年4月から6月にかけて発掘調査が実施されている。

註7:中世陶磁器の年代、生産地については名古屋大学教授植崎彰一氏、宮城県教育庁文化財保護課藤沼邦彦氏より教示を得た。

No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
1	土塹遺跡	塚、包含地	奈良、平安、中世(?)	34	坂ノ下浦I遺跡	集落跡	繩文、奈良、平安
2	四ツ塙遺跡	塚、包含地	奈良、平安、中世(?)	35	四ツ谷遺跡	集落跡	奈良、平安
3	樹形館跡	包含地、城館	繩文、奈良、平安、中世	36	民生病院裏遺跡	集落跡	奈良、平安
4	四ツ塙遺跡	塚	平安(?)	37	八幡前遺跡	塚	中世・近世
5	伊勢屋館跡	包含地、塚、城館	繩文、奈良、平安、中世	38	長者原II遺跡	集落跡	奈良、平安
6	藤沢館跡	城館	中世	39	一本松遺跡	包含地	奈良、平安
7	殿上館跡	城館	繩文、中世	40	大塊山遺跡	集落跡	繩文、奈良、古墳、奈良、平安
8	経塗遺跡	経塗	中世	41	清水沢I遺跡	包含地	中世・近世
9	小深沢殿上館跡	城館	中世	42	坂ノ下浦II遺跡	包含地	奈良、平安
10	館山館跡	包含地、城館	繩文、奈良、平安、中世	43	清水沢II遺跡	塚	中世・近世
11	的場山遺跡	包含地	繩文、奈良、平安	44	町田遺跡	包含地	奈良、平安
12	古館館跡	城館	中世	45	菜沢東遺跡	集落跡	繩文、奈良、平安
13	大鷲谷北向遺跡	包含地	繩文(後)	46	桃生田前遺跡	集落跡	奈良、平安、中世・近世
14	空堤遺跡	包含地	繩文(前)	47	下富前遺跡	包含地	奈良、平安、中世
15	寺山遺跡	包含地、寺院跡(?)	弥生、平安(?)	48	伯耆ヶ崎遺跡	集落跡	繩文、奈良、平安
16	砂田遺跡	包含地	奈良、平安	49	中三代遺跡	集落跡	奈良、平安
17	岩石I遺跡	集落跡	繩文(前・中)、弥生、古墳、奈良、平安	50	長根遺跡	包含地	奈良、平安
18	下山遺跡	包含地	奈良、平安	51	諏訪神社遺跡	包含地	繩文、奈良、平安
19	三代遺跡	包含地	古墳、奈良、平安	52	諏訪原塚塚	経塗	近世
20	荒町遺跡	包含地	繩文、古墳、奈良、平安、中世	53	暮欠遺跡	包含地、塚	繩文、奈良、平安
21	四ツ塙原遺跡	包含地	奈良、平安	54	野沢遺跡	包含地	奈良、平安
22	筒ヶ崎遺跡	包含地	繩文(前)、奈良、平安	55	袋沢遺跡	包含地	奈良、平安
23	泉谷遺跡	包含地	繩文、古墳、奈良、平安	56	五輪堂山遺跡	集落跡	奈良、平安
24	長者原I遺跡	包含地	奈良、平安	57	小深沢I遺跡	集落跡	奈良、平安
25	下藤沢II遺跡	集落跡、塚	奈良、平安、近世	58	小深沢II遺跡	集落跡	奈良、平安
26	杉ノ塙遺跡	塚	中世・近世	59	横森遺跡	包含地	奈良、平安
27	長者原III遺跡	包含地、塚	奈良、平安、中世・近世	60	ホイト塙遺跡	塚	中世・近世
28	泉谷館跡	包含地、城館	奈良、平安、近世	61	北ノ沢遺跡	包含地	奈良、平安
29	除館跡	城館	近世	62	清水山II遺跡	塚	中世・近世
30	旗塙遺跡	包含地、塚	奈良、平安、中世・近世	63	神田遺跡	集落跡	奈良、平安
31	古塙遺跡	塚	中世・近世	64	岩石II遺跡	包含地	繩文(中)
32	清水山I遺跡	集落跡	奈良、平安	65	寺沢遺跡	集落跡、塚	奈良、平安、中世・近世
33	下藤沢I遺跡	集落跡	奈良、平安	66	瀧脛遺跡	火葬墓	奈良、平安

第1表 潟峰町の遺跡(地名表)



III. 調査の方法と経過

今回の発掘調査は岩石Ⅰ遺跡の最北西端部、遺跡のうちでも最も標高の高い地域において実施した。ここは丘陵頂部を東西に継続する町道寺沢線と藤沢字要害地区からのびる農道寺沢・要害線が交差しており、町道寺沢線道路拡幅工事の大部分はその交差する所から東側が予定されていた。

宮城県築館農林事務所からこの計画を受けた瀬峰町教育委員会では、対象地域について同線のり面の断面観察、埋没しきらない竪穴住居を見い出す表面観察、およびボーリング調査を行なった。その結果、交差する所から東方、同線北のり面の拡幅対象地域に埋没しきらずに窪地として残る竪穴住居跡1棟の存在が確かめられたため、同事務所と協議の結果、工事に先立ち拡幅対象地域について発掘調査を実施することとした。

発掘調査は昭和56年7月20日、雑木が繁い茂る拡幅対象地域のうち、約62m²について Yunボで抜根と表土の除去を行なうことから開始された。その結果、当初の予想通り、未埋没竪穴住居跡が1棟検出されたが、その南側約半分は既存の町道寺沢線によって破壊されており、決して良い保存状況とは言えなかった。本住居跡の掘り上げ、および精査は翌21日から始められ、24日までに遺構の各種実測図、写真等、住居跡の記録化を全て完了し、発掘調査を終えることができた。



IV. 基本層序

I層

暗褐色(10YR 3/4)シルト層で、層厚は25cm前後、軟らかく、粘性はない。本遺跡の表土である。I層の上部は草木根によって擾乱が著しく、遺物の出土はほとんどないが、下部は比較的擾乱が進んでおらず、遺物の出土が認められる。

II層

褐色(10YR 4/4)シルト層で、層厚は10cm前後、ややかたく、粘性はない。部分的にI層から達した木根跡と思われる汚れが認められる。上部はI層との区別が比較的容易であるが、下部になるとつれてIII層との区別が困難となる。遺物は認められなかった。

III層

明黄褐(10YR 7/6)粘土層で、かたく、粘性がある。遺物は含まず、粗砂とバミスを多く含んでいる。本層は中里火山灰と呼ばれ、岩石I遺跡が所在する丘陵を形成する瀬峰層、高清水層上に厚く堆積するものである。

V. 検出された遺構と遺物

1. 1号住居跡と出土遺物

【確認面】プランの概要は基本層序II層上部において確認したが、明確なプランはII層下部まで掘り下げた時点で判明した。

【重複・増改築】認められない。

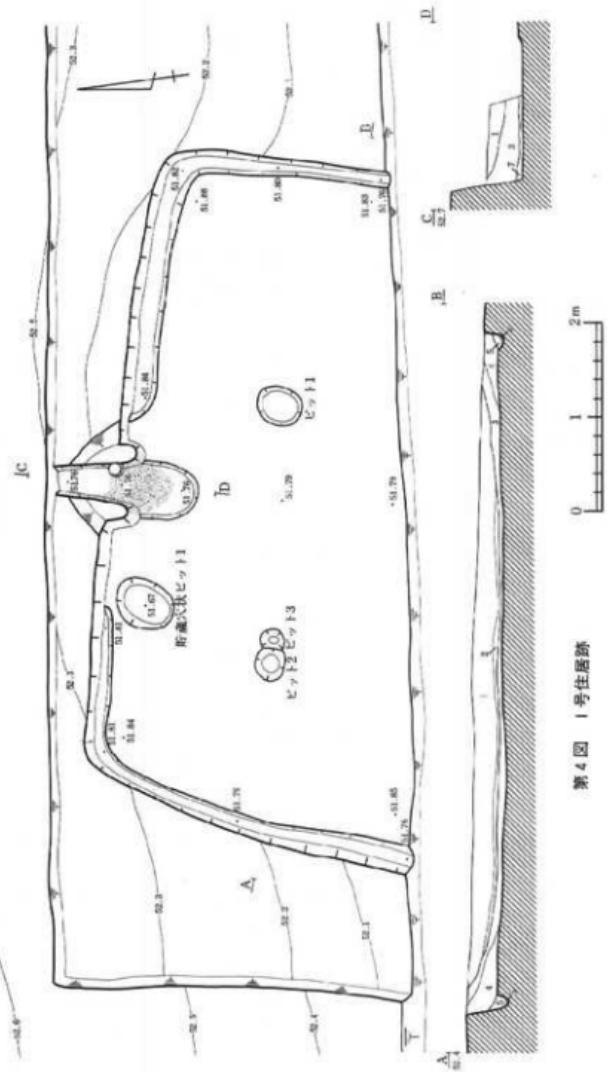
【規模・平面形】今回の発掘調査では北壁の全て、および東壁、西壁の約半分が検出された。残存する東壁、西壁の最大幅は7.27mで、方形を基準とする大型の住居跡であることが推定できる。

【竪穴層位】竪穴層位は4層に大別されるが、いずれも自然堆積層と考えられる。第1層(層No.1,2)は床面直近まで厚く堆積するが、その分布は壁まで至らず、住居跡の中央部を中心に分布する。層No.1はカマド内部の上層にも認められる。第2層(層No.3,4)は床面、および壁に堆積するもので、その分布は住居跡全体に及んでいる。層No.3はカマド内部の中～下層にも認められる。第3層(層No.5,6)は壁下部から周溝内に堆積するもので、層No.5は本住居跡廃絶後、最も初期の堆積土である。層No.6は周溝が機能していた時点で堆積したものであろう。第4層(層No.7)はカマド燃焼部、および煙道部に薄く堆積するが、混入物からカマド使用時点で堆積したものと理解される。

第3表 1号住居跡ビット

番号	区別	土、石、砂	土、石	土、石
1	断面Y 5% ビット1	砂利シート	砂利シート	砂利シート
2	にいわく断面Y 5% ビット2	砂利シート 砂利シート	砂利シート 砂利シート	砂利シート 砂利シート
3	砂利Y 5% ビット3	砂利シート	砂利シート	砂利シート
4	断面Y 5% ビット4	砂利シート	砂利シート	砂利シート
5	にいわく断面Y 5% ビット5	砂利シート	砂利シート	砂利シート
6	砂利Y 5% ビット6	砂利シート	砂利シート	砂利シート
7	砂利Y 5% ビット7	砂利シート	砂利シート	砂利シート

第2表 1号住居跡地図



第4図 1号住居跡

〔壁〕基本層序Ⅱ層、Ⅲ層からなり、最も保存の良い北西隅では49cmの高さで残存している。床面から急な角度で立ち上がる。

〔床面〕 基本層序Ⅲ層を床面としており、凹凸はない。床面レベルは場所によってやや高低が認められるものの、ほぼ平坦である。住居中央部からカマドにかけての部分を除いて、全体的にやわらかい。

【柱穴】2個検出されたが、掘り方と柱痕跡が区別されなかつたため、柱穴と断定しうるものではない。

〔カマド〕北壁に位置しており、燃焼部と煙道の一部が検出され、その境いに支脚と考えられる土師器甕が出土したが、奥壁としての段は認められなかった。燃焼部を支脚が出土した位置までと仮定した場合、奥行き38cm、幅93cmである。燃焼部内部の底面、側壁内面は火熱によって赤変している。また、燃焼部の手前には焚き口と思われる長円形の窪みが検出され、底面は火熱によって赤変している。なお、燃焼部側壁は基本層序Ⅲ層を削り出して構築したものである。煙道は調査区域の関係上、完掘することはできなかったが、長さ53cmまで検出した。側壁は火熱によって赤変しており、その底面レベルは燃焼部と比較してほとんど差はない。

〔貯蔵穴状ピット〕1個検出された。貯蔵穴状ピット1は長軸63cm、短軸50cm、深さ15cm、長円形である。堆積土は暗褐色(7.5YR 3/4)色、砂質シルトで、かたく、粘性はない。

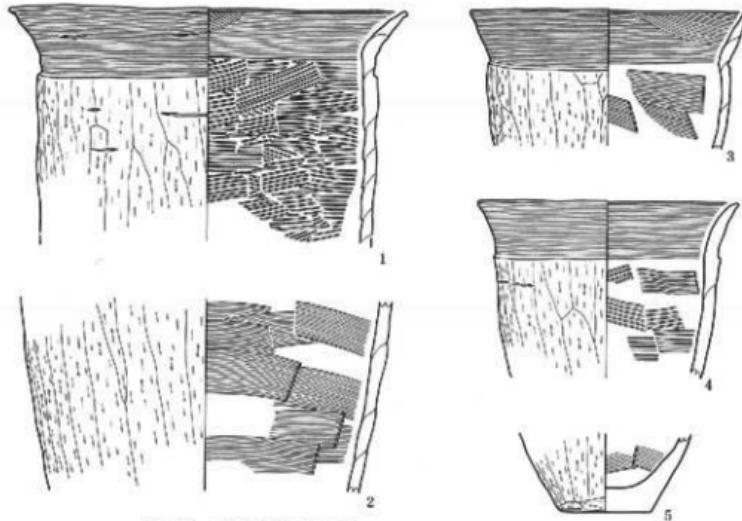
〔周溝〕壁と同様に全部は検出されなかったが、カマド燃焼部、およびその両側部分を除いて壁沿いに一層するものと思われる。周溝底面の幅7~19cm、床面からの深さ3~9cm、断面は「U」字形である。底面レベルは北壁下、カマド燃焼部両側が高く、東壁下、および西壁下とも南になるにつれて徐々に低くなる。カマド燃焼部下、およびその両側部分には周溝の掘り方は認められない。

品種	品種名	品種別										積出額			
		レーベル	本体	内→外	外→内	ロード	内→外	内→外	内→外	内→外	内→外				
外	外	新サトウ	新サトウ	二年生	一年生	複数	複数	複数	複数	複数	複数	外→内			
外	外	新サトウ	新サトウ	二年生	一年生	複数	複数	複数	複数	複数	複数	外→内			
外	外	新サトウ	新サトウ	二年生	一年生	複数	複数	複数	複数	複数	複数	外→内			
内	内	新サトウ	新サトウ	二年生	一年生	複数	複数	複数	複数	複数	複数	内→外			
内	内	新サトウ	新サトウ	二年生	一年生	複数	複数	複数	複数	複数	複数	内→外			
内	内	新サトウ	新サトウ	二年生	一年生	複数	複数	複数	複数	複数	複数	内→外			
新サトウ	新サトウ					1						3			
新サトウ	新サトウ						1					1			
新サトウ	新サトウ	1	1	13.4	2	13.1	2.1	1.2	3.8	1.1	1	63			
新サトウ	新サトウ	1	1	2		3	3	1	2	1		21			
ビート上種	ビート上種					1						2			
ヒルヒル	ヒルヒル					1						2			
カナリ高麗	カナリ高麗			1	2	2			3		1	9			
高麗	高麗	1	1	1	3.1	1	7.7	2	5		2.1	25			
合計	合計	1	3	12	1	25.0	6.1	24.6	3.2	6.5	1.1	2.2	131	1	125

第4表 1号住居跡出土土器破片資料

師器甕、計5点である。

いずれも製作に当ってロクロを使用しないもので、器高が口径より大きい長胴形を呈する比較的大型のもの(第5図1,2)、器高と口径がほぼ等しい短胴形を呈する小型のもの(第5図3,4,5)がある。1は床面出土のもので、体部中央から底部を欠く。頸部に段をもつもので、口縁部はほぼ直線的に外傾するが、口唇部は薄くシャープである。体部の彫みはほとんど認められない。口縁部外面にはヨコナデ、体部外面にはケズリ、体部内面にはハケ目が施される。2はカマド支脚と考えられるもので、体部だけが残存する。体部の彫みが弱いものである。体部外面にはケズリ、体部内面にはヘラナデが施される。3はカマド支脚と考えられるもので、体部中央から底部を欠く。頸部に段をもつもので、屈曲は弱く、口縁部は直線的に外傾する。体部上半に極く弱い彫みをもつ。口縁部外面にはヨコナデ、体部外面にはケズリ、体部内面にはヘラナデが施される。4は床面出土のもので、体部下半と底部を欠く。頸部に段をもつが、屈曲は極く弱く、口縁部はわずかな丸味をもって外傾する。口唇部は薄くシャープである。体部の彫みはほとんど認められない。口縁部外面にはヨコナデ、体部外面にはケズリ、体部内



第5図 I号住居跡出土遺物

番	種別	層位	外 面	底部	内 面	備 考
1	土器	床面	横ナデ・削り、削葉縞10YR5%	—	横ナデ・削毛目、色調外表面	
2	土器器底	カマド支脚	削り、横5YR5%	—	横ナデ、黄褐色10YR5%	
3	土器器底	カマド支脚	横ナデ・削り、横5YR5%	—	横ナデ・削ナデ、色調外表面	図版7-1
4	土器器底	床面	横ナデ・削り、削葉縞10YR5%	—	横ナデ・削毛目、横7.5YR5%	
5	土器器底	床面	削り、横5YR5%	削り	横ナデ、横7.5YR5%	

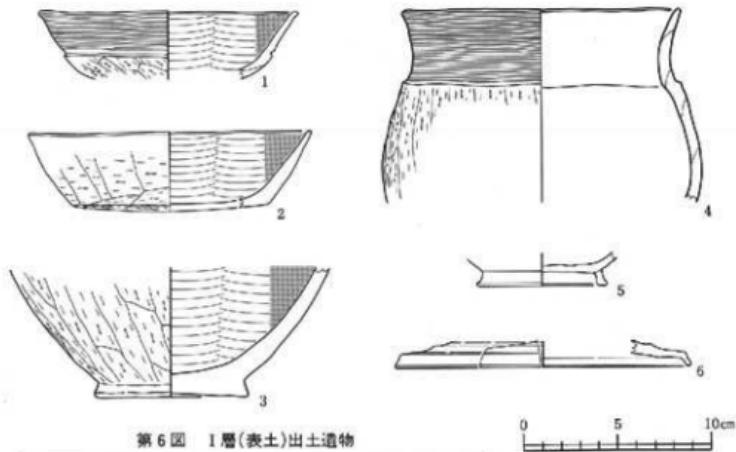
0 5 10cm

面にはハケ目が施される。5は床面から出土したもので、体部下半、底部だけが残存する。外面にはケズリ、内面にはヘラナデが施される。

2. I層(表土)出土遺物

I層(表土)から出土したものとしては土師器の壺、鉢、甕、須恵器の高台付壺、蓋、甕、石鏡がある。図化できたのは土師器壺2点(第6図1,2)、鉢1点(第6図3)、甕1点(第6図4)、須恵器高台付壺1点(第6図5)、蓋1点(第6図6)、石鏡1点(第7図1)、合計7点である。

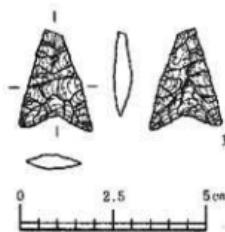
土師器壺はいずれもロクロを用いないで製作したもので、1は体部が丸味をもって外傾し、口唇部が軽く外反する丸底のものである。外面は体部中央に沈線がめぐらされており、沈線を境として口縁部にヨコナデ、体部、底部にケズリが認められる。内面はミガキと黒色処理が施される。2は極く弱い丸底風の底部から口縁部にかけてほぼ直線的に外傾するものである。外面は口縁部の調整が不明であるが、体部、底部にはケズリが認められる。内面はミガキと黒色処理が施されている。3は体部上半以上を欠く。ロクロを用いて製作したもので、体部が弱い膨みをもつものである。外面は底部の調整が不明であるが、体部にはケズリが認められる。内面には荒いミガキと黒色処理が施される。4は体部中央の膨みが口径よりもやや大きい胴張



第6図 I層(表土)出土遺物

No.	種類	外観	底	内観
1	土師壺	横ナデ・丸底・ケズリ、底7.5YR8/6	ケズリ	ミガキ・黑色処理、底7.5YR8/6
2	土師壺	ケズリ、底7.5YR8/6	ケズリ	ミガキ・黑色処理、オリーブ7.5YR8/6
3	土師器	ケズリ、底7.5YR8/6	—	ミガキ・黑色処理、基盤2.5YR8/6
4	土師器	横ナデ・附り、底7.5YR8/6	—	ミガキ・黑色処理、底7.5YR8/6
5	須恵器高台付壺	横横ナデ、底7.5YR8/6	横横ナデ	横横ナデ、色調外底同
6	須恵器	横横ナデ、底7.5YR8/6	—	横横ナデ、底40YR8/6

り形のもので、体部下半と底部を欠く。頭部に段をもち、口縁部下半は一端内傾するが、中央部から極く弱い丸味をもって外傾する。外面は口縁部がヨコナデ、体部にはケズリが施されるが、内面は摩滅により不明である。5は平底の坏部に下端が外方に張り出した台部を付したもので、体部、口縁部を欠く。内外面ともロクロ調整が施され、また、底部の切り離しもロクロ調整によって不明である。6は口縁部内面にかえりをもたず、口唇部は内側に短く折れ曲がる。天井部を欠き、口縁部内外面はロクロ調整されている。第7図1は基部の凹みが強い二等辯三角形を呈するものである。尖頭部を欠損している。頁岩を素材としている。



第7圖 1層(表土)出土遺物

序	名称	长×宽×厚cm	重g	石材
1	石凳	12.8×2.0×0.5	12.0	青石

第5表 1層(表土)出土土器破片資料

VI. まとめ—遺構と遺物の検討—

1. 遺物

今回の調査は極く小規模なものであったため、出土した遺物の量は少ない。1号住居跡と表土から出土した資料数は、破片資料を含めても土師器の壺が16点(うち実測資料2点)、鉢が2点(同1点)、甕が159点(同6点)、瓶が1点、須恵器の壺が1点、高台付壺が2点(同1点)、甕が4点、蓋が1点(同1点)、それに石鐵1点を数えるだけである。ここでは1号住居跡と表土から出土した実測資料について検討を加えることとする。

1号住层踏

1号作居跡から出土した実測資料としては床面から出土した土師器の甕(第5図1、4、5)、カマドの支脚として利用されていた土師器の甕(第5図2、3)がある。全体形をうかがうことのできる資料はないが、長胴形を呈する比較的大型のもの、短胴形の小型のものとがある。いずれもロクロを用いずに製作されたもので、口縁部内外面にはヨコナデ、体部外面にはケズリ、

体部内面にはハケ日やヘラナデが施されている。口縁部から体部にかけての部位が残存する1、3、4は頸部に明瞭な段をもつものである。

以上のような特徴をもつ土師器の甕は志波姫町糠塚遺跡第1群土器(小井川・手塚:1978.3)、それに本遺跡の南東約1kmの地点に所在する瀬峰町大境山遺跡第4土器群(阿部・赤沢:1983.3)に類例が認められるところから、国分寺下層式(氏家和典:1961.3、1967.9)の中でも新しい段階、8世紀後葉に比定することができる。

表 土

表土から出土した実測資料としては土師器の坏(第6図1、2)、体(第6図3)、甕(第6図4)、須恵器高台付坏(第6図5)、蓋(第6図6)、石鎌(第7図1)がある。

土師器の坏はいずれもロクロを用いて製作したもので、内面はミガキ調整の後、黒色処理が施されている。外面に沈線がめぐらされたもの(第6図1)、段や沈線、稜線が認められないもの(第6図2)とがあるが、年代的には8世紀代とされる国分寺下層式の範疇で把握されるものと思われる。

即ち、前者は外面に沈線がめぐらされ、それを境いとして口縁部にヨコナデ、体部にケズリを有するという特徴から高清水町觀音沢遺跡出土土器群(加藤・阿部:1980.9)、同町五輪C遺跡第2号住居跡出土土器(小野寺祥一郎:1979.8)、大境山遺跡第3土器群中に類例を求めることができるものである。このタイプは宮城県内でも未だその出土例が少なく、明確な所属年代を指摘することは困難であるが、本例は国分寺下層式の中でも古い段階とされる觀音沢遺跡出土土器群よりも若干、年代的に新しいと思われる五輪C遺跡第2号住居跡出土土器、大境山遺跡第3土器群に近似した特徴を持っている。よって、国分寺下層式の中頃、概ね8世紀の中葉のものと理解しておきたい。後者については、国分寺下層式の標式資料とされる糠塚遺跡に類例が認められるところから、国分寺下層式の新しい段階、8世紀後葉に位置づけられると思われる。

内面がミガキ調整の後、黒色処理された土師器の体、胴張り形を呈する土師器の甕について製作にあたってロクロを用いていないこと、体部外面がケズリ調整されていることから、前述した1号住居跡出土の土師器甕と同様の年代を推定することができよう。

須恵器高台付坏と蓋については、前者はロ縁部までの全体形が不明で、しかも底部の切り離し痕跡が高台を取り付ける際のロクロナデによって消し去られていること、後者は極く小さな破片であることなどの理由から詳細な年代を考えることは不可能である。しかし、本遺跡に近接する大境山遺跡においては、第4土器群中に類似する資料が認められるところから両者の年代を概ね、国分寺下層式の後葉頃とおきたい。

石鎌については、第1号住居跡とは大きく年代を異にする繩文時代のものと考えられる。

2. 遺構

1号住居跡

今回の調査では町道によって半壊された住居跡1棟が検出されたに止まるため、本項では気づいた事柄について略述し、まとめとしたい。

1号住居跡は広大な丘陵上に展開する岩石I遺跡の中でも最高所部分、すなわち、標高52mの地点に位置している。この地域では現在までのところ、本住居跡のほか4棟の竪穴住居跡、2基の小竪穴遺構が確認されており、精査を行なえばその数はさらに増えるものと推定される。^{註1}

1号住居跡の年代については床面出土の上部器皿（第5図1,4,5）、カマドの支脚として転用されていた土器器皿（第5図2,3）を年代決定資料とするのが妥当である。前項ではこれらを国分寺下層式の中でも新しい段階、8世紀後葉と位置づけたが、破片資料として集計表に掲げたものの中にも、この年代と大きく矛盾する資料は認められなかった。よって、本住居跡を上記の年代に比定してもさしつかないと考える。

ところで、1号住居跡は発掘調査に先立って行なわれた踏査の際、竪穴部分が完全に埋没しきらばくに窪地として認められたもので、こうした状況で発見される竪穴住居跡は、北海道では擦文土器段階の住居跡に数多く認められている。宮城県内においても弥生時代から古墳時代にかけての名取市十三塚遺跡（宮城県教育委員会：1975.3、恵美・齊藤：1980.3）、奈良・平安時代の追町対島遺跡（加藤・伊藤：1955.3）、高清水町手取遺跡（佐藤信行氏の教示による）、瀬峰町大境山遺跡（阿部・赤沢：1983.3）、民生病院裏遺跡、清水山I遺跡などで散見することができるものである。今後、調査の進展に伴なってその数は増加するものと思われる。

さて、本住居跡はその南側半分を町道によって既に削り取られていたが、残存する北側では、辺が7.2mもあることが分かった。奈良・平安時代の住居跡が数多く発見されている瀬峰町内において、このような大型住居跡の検出例は稀であり、昭和50年、岩石I遺跡第1次調査で検出された7.6m×7.2mの住居跡例を挙げることができるだけである。

周溝はカマド焼成部、およびその両側を除いた部分にめぐらされたもので、深さ3～9cm、幅7～19cm、断面は「U」字形を呈する。底面レベルは北壁下部分が最も高く、南側になるにつれて徐々にそのレベルを減じる。また、その堆積土は壁際から周溝下部にかけて分布するにぶい黄褐色砂質粘土と周溝底面を覆う褐色シルト質砂から構成されている。周溝がこのような状況で確認された例としては、近接する大境山I遺跡第3土器群段階以降の住居跡群が顕著であり、同報告書では排水溝としての機能を果していたものと推定している。よって、本住居跡の周溝も同様な機能をもつものと考えておきたい。

註1：4棟の竪穴住居跡とは昭和53年度、昭和55年度に行なわれた町道寺沢線拡幅工事の際に検出された3棟、

それに昭和55年度に実施された畠地造成工事の際、発見された1棟のことである。

前者3棟は拡幅された町道北側の法面にその断面が露出したもので、今回、発掘調査を行なった1号住居跡の西方84m、142m、194mの地点に所在する。84m地点の住居跡(図版4下段)は整穴部分が完全に埋没しきらずに窓んでいるもので、残存部分は杉林になっている。142m地点のもの(図版4上段、下段)においては、住居東壁近くの底面から底部を上にした土師器甕(第9図1)が出土している。周囲に多量の焼土を伴なうところから、カマドの支脚として転用されたものであろう。194m地点のもの(図版6上段)では西壁に強く近い堆積土から上師器甕(第8図7)が出土している。後者の1棟は194m地点に所在する住居跡の北側、丘陵頂部平坦面からやや下った地点で発見されたものである。削平によって土師器甕の体部破片が散乱していたが、明確なプランを確認しないまま今日に至っている。142m、194m地点の住居跡、それに194m地点住居跡北側に位置する住居跡、計3棟は現在、畠地となっている。

小整穴遺構は前述の寺沢線拡幅工事、畠地造成工事の際、それぞれ1基ずつ発見されている。拡幅工事で検出された小整穴遺構(図版6下段)は1号住居跡西方106mの地点、北側法面に現われたもので、その幅は1m前後、両壁は火熱によって赤変している。堆積土中からは土師器甕の赤焼き土器(第8図6)が出土している。畠地造成で発見された小整穴遺構は、1号住居跡西方194m地点住居跡北側に位置する住居跡よりもさらに北側にある。丘陵頂部平坦面から検出されたもので、最上部に黒色シルト、その下には灰白色シルトが堆積するものである。

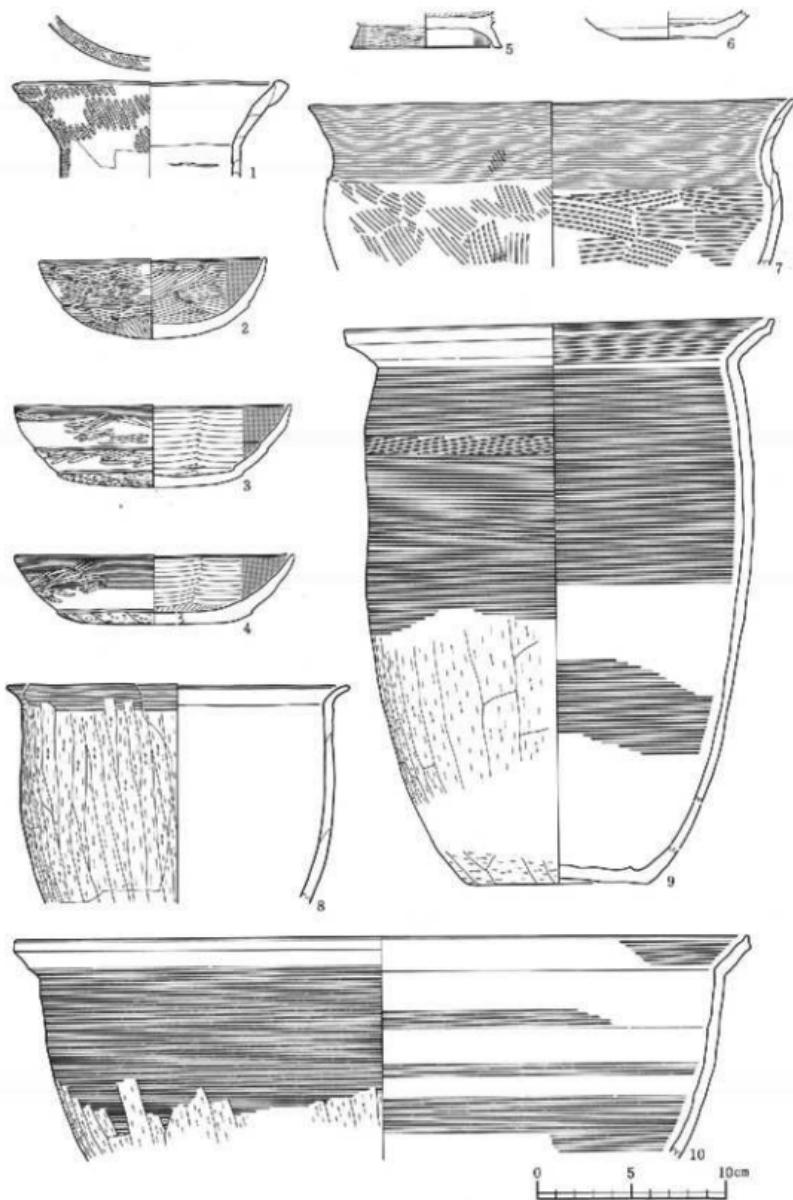
VII. 付 編 —— 岩石I遺跡、及び周辺の遺跡から発見された遺物 —

今回、発掘調査を実施した岩石I遺跡は、蕪栗沼に向って東流する瀬峰川と小山田川にはさまれた緑豊かな丘陵上に広大な面積を有して立地している。しかし、近年、土地の有効利用を目的とするミニ開発が頻発し、本遺跡は各所で浸透を余儀なくされつつある。このような状況は本遺跡と同一丘陵上に点在する周辺遺跡もまた同様で、徐々に破壊が進行しつつある。本項では数年来、これらの遺跡を踏査した際に採集した遺物を各遺跡ごとに収録し、後日、各遺跡を考える一資料とした。

岩石I遺跡から採集された遺物(第8図、第9図)

第8図1は昭和55年、前章遺構の註1末尾に記した丘陵頂部平坦面検出の小整穴遺構周辺から発見されたが、堆積土に灰白色火山灰をもつ同遺構とは全く関係ないと考えられる。弥生土器の壺で、口縁部から頸部にかけて残存する。口縁部は複合口縁といわれる形状をなし、外面は口唇部も含めて繩文RLが施文され、内面にはナデ調整が施されている。色調は内外面ともに暗褐色(10YR%)を呈し、焼成は良好である。弥生時代後期、天王山式(伊東信雄: 1950.10、藤田定市: 1951.1、1951.10、坪井清足: 1953.5)に比定されるものである。

第8図2~4はいずれもロクロを用いて製作した土師器の壺で、国分寺下層式の中でも新しい段階と考えられるものである。2(図版7-2)は丸底で、外面は体部中央に軽い段がめぐらされ、全面に微細なミガキが認められる。内面もまた、細かなミガキと黒色処理が施されたものである。色調は外面がにぶい橙色(7.5YR%), 内面は黒色(10YR%)を呈する。3(図版7-3)は



弱い丸底で、外側は体部中央、下部に2つの段がめぐらされ、口唇部にはヨコナデのちミガキ、体部にはミガキ、体下部、底部にはケズリが施されている。内面には外側の段に対応する2条の稜が付されており、ミガキと黒色処理が認められる。色調は外側がにぶい橙色(5YR 5/6)、内面は黒色(10YR 1/8)を呈する。4(図版7-4)は極く弱い丸底で、外側は体下部に段を有し、口縁部にはヨコナデのちミガキ、体下部、底部にはケズリが施されている。内面にはミガキと黒色処理が認められる。色調は外側がにぶい褐色(7.5YR 5/6)、内面は黒色(5YR 1/8)を呈する。

第8図5、6はともに表杉ノ入式に属するものである。5は内外面ともに黒色処理を施した土器器の高台付坏である。坏部外側は残存部分が僅少なため調整は不明であるが、内面にはミガキが認められる。台部については、外側はロクロナデのちミガキが施されているが、内面の調整は不明である。色調は内外面ともに黒褐色(2.5YR 3/8)を呈する。6は前章遺構の註1、1号住居跡西方106m地点から検出された小堅穴造構堆積土器坏である。底部、体下部しか残存していないが、内外面ともロクロナデが施され、底部は回転糸切りによって切り離されている。色調は内外面ともににぶい褐色(7.5YR 5/6)を呈する。

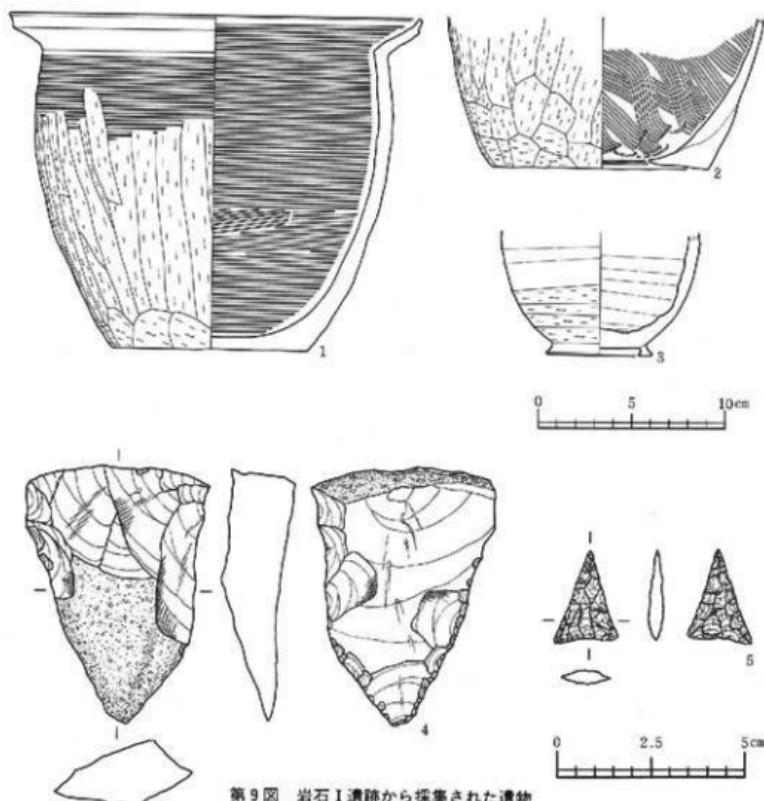
第8図7は1号住居跡西方194m地点検出の住居跡から出土した土器器表で、西壁の近く、床面からわずかに浮き上がった状況で出土した。口径が器高より大きい広口形で、ロクロを使用しないで製作したものである。体部下半、底部を欠く。頸部に明瞭な段を有し、内外面ともに口縁部にはヨコナデ、体部にはハケ目が施されている。色調は内外面ともににぶい黄橙色(10YR 4/6)を呈する。国分寺下層式に比定されるものである。

第8図8～第9図1は表杉ノ入式に属する上器器の表である。8は広口形のもので、製作にあたってロクロを用いていない。残存口縁部が1/4以下で、しかも体下部、底部を欠く。外側は口縁部と体部が弱い稜線によって区画され、それを境として口縁部にはヨコナデ、体部にはケズリが施されるが、ケズリが部分的に口縁部ヨコナデ帶に及ぶところもある。内面の調整は摩滅により不明である。色調は内外面ともに明黄褐色(10YR 4/6)を呈する。本例に類似する資料は大境山遺跡23号住居跡や25号住居跡などから出土しており、第5土器群段階、すなわち表杉ノ入式前集に位置づけられている。9(図版7-6)は器高が口径より大きい長胴形のもので、製作にあたってロクロを用いている。外側は口縁部に明瞭なロクロナデ、体部上半には回転ハケ目、体部下半、底部にはケズリが認められる。内面は口縁部から体部下半にかけて回転ハケ目が施されている。色調は外側が橙色(7.5YR 5/6)、内面はにぶい黄橙色(10YR 4/6)を呈する。10はロクロ使用の広口形のもので、体下部、底部を欠く。外側は口縁部にロクロナデ、体部上半には回転ハケ目、体部下半にケズリが施されている。内面はロクロナデのち、不徹底な回転ハケ目が認められる。色調は内外面ともに黄橙色(7.5YR 5/6)を呈する。なお、本土器の体部削れ口からは板の压痕が認められており、その詳細は大境山遺跡の報告書に収録してある(佐々木・阿部

：1983.3.)。1(図版7-5)は1号住居跡西方142m地点検出の住居跡東壁底面から多量の焼土とともに出土した。カマドの支脚として転用されていたものであろう。ロクロ使用の広口形で、外側は口縁部にロクロナデ、体部上半には回転ハケ目、体部下半、底部にはケズリが施される。内面は全面に回転ハケ目が施されている。色調は内外面ともに橙色(7.5YR %)を呈する。

第9図2は表杉ノ入式に所属すると思われる土師器瓶で、全体的に粗雑なつくりのものである。単孔式で体部下半、底部だけが残存する。外面は体部がケズリ、底部は穿孔後、ナデ調整が施され、内面にはハケ目が認められる。色調は外面が橙色(7.5YR %)、内面は黄橙色(10YR %)を呈する。

第9図3は小形の須恵器高台付壺で、体部中央以下が残存する。外面は体中央にロクロナデ、



第9図 岩石I遺跡から採集された遺物

体下部にケズリが認められるが、底部は高台を取り付ける際のロクロナデによって切離しは不明である。内面にはロクロナデが施されている。色調は内外面ともに灰白色(5 Y 1/2)を呈する。

第9図4、5は概ね縄文時代のものであろう。4(図版7-9)は2つの縁辺に粗雑な刃部がつくりだされた安山岩製スクレーバーで、表面の風化が幾分進んでいる。長さ6.9cm、幅5.0cm、厚さ2.0cm、重さは62.5gである。5は基部の凹みが極く弱い二等辺三角形の頁岩製石鏃である。長さ2.5cm、幅1.7cm、厚さ0.4cm、重さは1.9gである。

岩石II遺跡から採集された遺物(第10図)

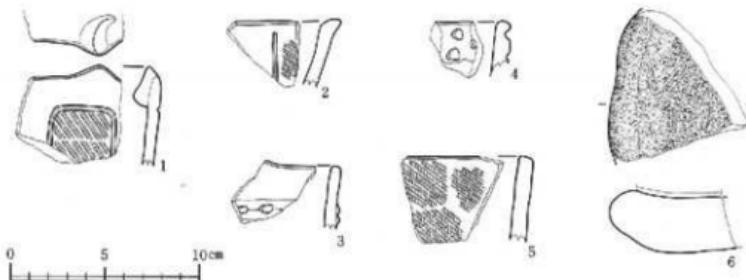
第10図1～5はいずれも細片で保存状況も悪いため、詳細な年代は断定しかねるが、概ね縄文時代中期大木10式期頃のものであろう。

1は山形の小突起を有する深鉢形土器で、外面の小突起下には縄文RL・光墳の方形沈線区画文が配されている。内面は小突起部分に「ノ」字状隆線文が貼付されている。色調は内外面ともに明赤褐色(2.5 YR %)を呈する。2は平縁の鉢形土器と考えられ、外面は口縁部直下から垂下する沈線文と縄文RLが施文されている。色調は内外面ともに明黄褐色(10 YR %)を呈する。3は山形小突起を有する深鉢形土器で、外面は隆線文とその上に刺突文が施文されたのち、ミガキ調整が施される。内面は横位のミガキが施されている。4は外面口縁部下に複数の刺突文を配した深鉢形土器で、器厚がやや厚いものである。色調は内外面とも明赤褐色(2.5 YR %)を呈する。5は外面に縄文RLが施文される深鉢形土器で、内面には横位のミガキが認められる。

第10図6は砂岩製石皿で、約1/3程度が残存する。風化が激しく保存状況は悪い。周縁部がやや高まっており、その内側部分に使用面が認められる。残存部分の厚さは3.0cm、重さは224.8gである。

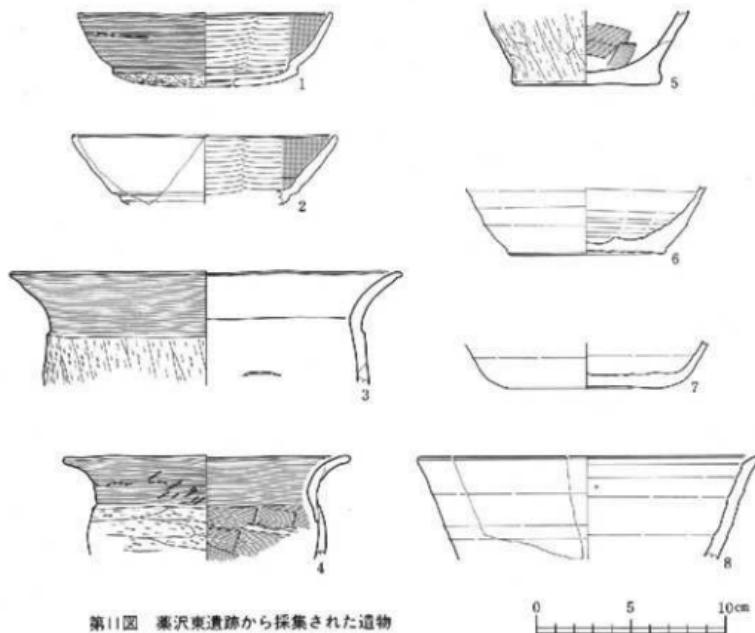
薬沢東遺跡から採集された遺物(第11図)

第11図1～5はいずれもロクロを用いて製作した土師器の环、甕で、国分寺下層式に併行



第10図 岩石II遺跡から採集された遺物

するものである。1は底部が弱い丸底をなす环で、外面は体下部に段を有し、それを境いとして口縁部にヨコナデ、体下部、底部にケズリが施される。内面には外面の段に対応する明瞭な段が付され、ミガキのうち黒色処理が施されている。色調は外面がにぶい黄橙色(10YR 5/6)、内面は黒色(10YR 1/2)を呈する。なお、本例は底部中央に直径3.0cmの円孔を持つ。しかし、その円孔部分の保存状況が不良なため、焼成前の穿孔なのか、焼成後の穿孔なのか判然としない。2は口縁部残存以下、底部が僅かに残っているにすぎない小破片である。外面は体下部に一条の沈線がめぐらされているが、調整は摩滅により不明である。内面はミガキと黒色処理が施されている。色調は外面が明黄褐色(10YR 4/6)、内面は黒色(7.5YR 1/2)を呈する。3は口縁部、体部上半だけが残存する甕で、外面は頸部に明瞭な段を有し、口縁部にはヨコナデ、体部にはケズリが施される。内面は摩滅により不明である。色調は内外面ともに明黄褐色(10YR 4/6)を呈する。4は口縁部が強く湾曲しながら外傾する甕で、体部中央以下を欠く。外面は頸部に段を有し、口縁部はヨコナデ、体部は横位のケズリが施されている。内面は口縁部がヨコナデ、体部にはヘラナデが施される。色調は内外面ともににぶい黄褐色(10YR 5/6)を呈する。5は体部下半、底部だけが残存する甕で、外面は体部、底部とともにケズリが施される。内面にはヘラナデ



第11図 薩沢東遺跡から採集された遺物

が認められる。色調は外面がにぶい褐色(7.5YR%)、内面はにぶい黄橙色(10YR%)を呈する。

第11図6はロクロを用いて製作した土師器の甕で、表杉ノ入式に比定されるものである。体部下半、底部だけが残存する。体部は内外面ともにロクロナデ調整が施され、底部外面には静止糸切り痕が明瞭に認められる。色調は外面が黄橙色(10YR%)、内面は橙色(7.5YR%)を呈する。

第11図7、8は国分寺下層式に属する須恵器である。7は底径の大きい甕で、体部上半、口縁部を欠く。体部には内外面ともロクロナデが認められ、底部外面はヘラケズリによって調整されている。色調は内外面ともに灰色(7.5YR%)を呈する。8は大型の甕(高台付甕も含む)、もしくは鉢と思われる。内外面とも体部はロクロナデによって調整されている。色調は内外面ともに灰オリーブ色(7.5Y%)を呈する。

清水山I遺跡から採集された遺物(第12図1~4)

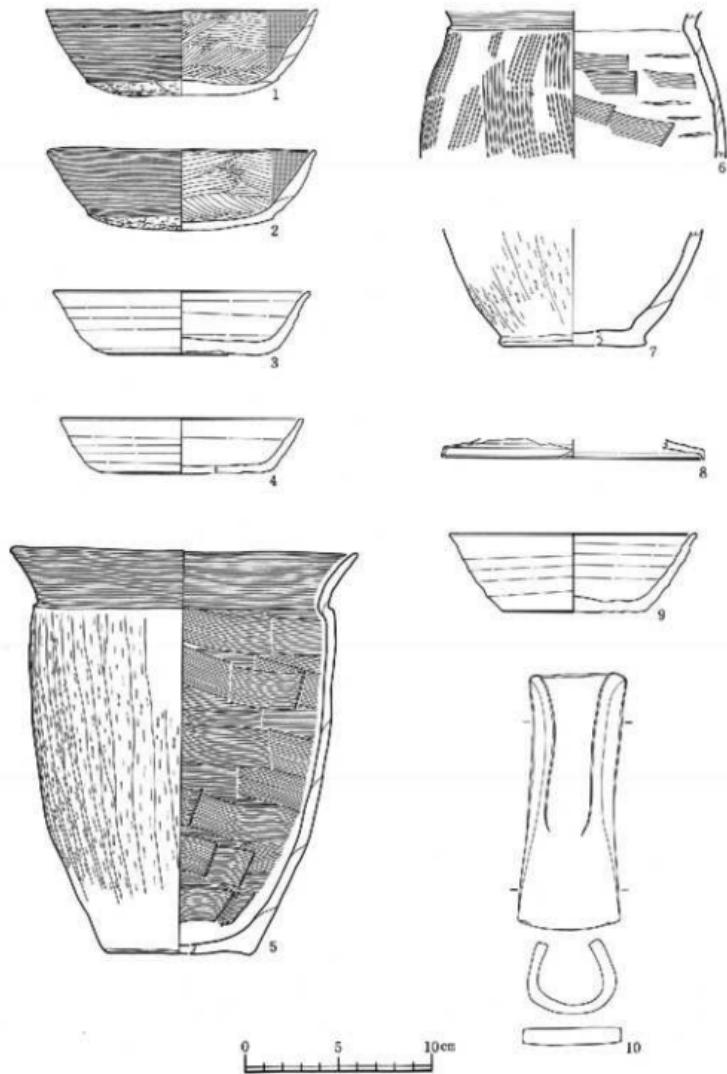
清水山I遺跡においては、現在でも完全に埋没しきらずに窪地として残る竪穴住居跡が存在する。瀬峰小学校裏門(東門)を入ると左手前方に杉林があり、この中に未埋没の住居跡3棟を見ることができる。本項で紹介する遺物はそのうちの1棟、門から進んで約43m程の地点、道路によって半壊された住居跡の床面から出土した一括資料である。所属年代としては国分寺下層式の中でも、概ね前葉から中葉頃のものであろう。

第12図1、2はいずれもロクロを用いて製作した土師器の甕で、外面には体下部に段が認められる。調整は段を境いとして口縁部にはヨコナデ、体下部、底部にはケズリが施される。内面はミガキののち、黒色処理が施されている。1の外面色調はにぶい黄橙色(10YR%)、内面は黒色(5YR%)を呈する。2は外面がにぶい黄橙色(10YR%)、内面は黒色(2.5Y%)を呈する。

第12図3、4は底部の切り離しが回転ヘラ切りによる低平な器形の須恵器甕である。口縁部、体部は内外面ともロクロナデ調整されている。3は回転ヘラ切りののち、ナデ調整が底部外面に施されている。色調は内外面とも黄灰色(2.5Y%)を呈する。4の色調は内外面とも灰白色(2.5Y%)を呈する。

寺沢遺跡から採集された遺物(第12図5~8)

第12図5~7はロクロ不使用の土師器甕で、国分寺下層式併行のものである。5は器高が口径より大きい長胴形の甕で、外面は頸部に明瞭な段をもつ。口縁部にはヨコナデ、体部にはケズリが施されている。底部外面の調整は摩滅により不明である。内面は口縁部にヨコナデ、体部にはヘラナデが認められる。色調は外面が橙色(7.5YR%)、内面は浅黄色(2.5Y%)を呈する。6は体部中央が膨む長胴形の甕と考えられ、頸部、体部上半だけが残存する。外面は頸部に段を有し、それを境いとして口縁部にはヨコナデ、体部にはハケ目が施される。体部内面にはヘラナデが認められる。色調は内外面ともに橙色(7.5YR%)を呈する。7は体部下半、底部だけの破片資料で、体部外面にはケズリが施されている。底部外面、及び体部の内面は摩滅により



第12図 清水山I遺跡・寺沢遺跡・小深沢I遺跡、
板ノ下浦遺跡から探集された遺物

不明である。色調は内外面ともに黄橙色(10YR 7/6)を呈する。

第12図8は天井部を欠く須恵器蓋の小破片で、口縁部内面にかえりを持たないものである。口縁部は内側に短く折れ曲がり、内外面ともロクロナデ調整されている。国分寺下層式頃と考えられる。

小深沢I遺跡から採集された遺物(第12図9)

第12図9は底部が回転ヘラ切りによって切り離された須恵器の环で、底径がやや小さく、器高が高いものである。口縁部、体部は内外面ともロクロナデ調整されている。色調は内外面とも灰色(5Y 5/2)を呈する。国分寺下層式併行と考えられる。

坂ノ下浦I遺跡から採集された遺物(第12図10)

第12図10は基部が両側から折り曲げられて袋状の茎を形成し、刃先は極くゆるやかに張り出す鉄製の矛である。全長13.8cm、刃部の幅5.5cm、基部における鉄の厚さ0.5cm、重さ614.3g(保存処理後)と極めて大型のものである。国分寺下層式、あるいは表札ノ入式、いずれに属するか不明である。

註1：これらの遺物は日本考古学協会員佐藤信行氏、瀬峰町文化財保護委員会佐々木尚見氏、瀬峰町公民館長生々木傳雄氏が採集したものである。公表にあたっては各氏から特段の配意を嘱託した。記して謝意を表する次第である。

引　用　文　獻

- 阿部・赤沢(1983.3)：「大塙山遺跡」『瀬峰町文化財調査報告書』第4集 P.1-442 瀬峰町教育委員会
- 阿部・赤沢(1984.3)：「瀬峰町大里宇富蒲原出土の藏骨器、および骨片」『瀬峰町の文化財』第3集 P.6-9 瀬峰町教育委員会
- 阿部正光(1983.3)：「瀬峰町三代遺跡出土の土器」『瀬峰町の文化財』第2集 P.1-3 瀬峰町教育委員会
- 阿部・佐藤(1978.3)：「長者原貝塚」『南方町文化財調査報告書』第1集 P.1-78 南方町教育委員会
- 伊東信雄(1950.10)：「東北地方の弥生式文化」『文化』復刊8号 P.40-64 東北大文学会
- 伊東信雄ほか(1969.3)：「埋蔵文化財緊急発掘調査概報 長根貝塚」『宮城県文化財調査報告書』第19集 P.1-86 宮城県教育委員会
- 氏家和典(1961.3)：「土器」『陸奥国分寺跡発掘調査報告書』P.91-97 宮城県教育委員会
- 氏家和典(1967.9)：「陸奥国分寺跡出土の丸底环をめぐって」『柏倉亮吉教授還暦記念論文集』P.77-88
- 恵美・齐藤(1980.3)：「三塚遺跡」『名取市文化財調査報告書』第8集 P.1-19 実測図1-4 図版1-4 名取市教育委員会
- 岡村・鎌田(1980.3)：「宮城県北部の旧石器時代について」『研究紀要』第6卷 P.1-28 東北歴史資料館
- 小野寺洋一郎(1979.8)：「五輪C遺跡」『宮城県文化財調査報告書』第61集 P.1-116 宮城県教育委員会
- 加藤・阿部(1980.9)：「観音沢遺跡 東北新幹線関係遺跡調査報告書N-1」『宮城県文化財調査報告書』第72集 P.131-349 宮城県教育委員会
- 加藤・伊藤(1955.3)：「宮城県登米郡新田村字対馬豊穴住居址群」『登米郡新田村史』P.13-25 新田村
- 加藤道男(1980.3)：「東館遺跡 東北新幹線関係遺跡調査報告書」『宮城県文化財調査報告書』第65集 P.243-304 宮城県教育委員会

- 奥野義一（1976.1）：「考古学からみた高清水」「高清水町史」P.71～100 高清水町
- 小井川・手塚（1978.3）：「織峰遺跡－宮城県文化財発掘調査報告－」『宮城県文化財調査報告書』第53集
P.44～198 宮城県教育委員会
- 小山・竹原（1973.1）：「新版標準土色帳」（4版） P.1～14 付表1～7 図1～5 色片表1～12
日本色研事業株式会社
- 佐々木・阿部（1982.3）：「瀬峰町の遺跡－下富前遺跡・桃生田前遺跡・中三代遺跡－」『瀬峰町の文化財』第1集
P.1～2 瀬峰町教育委員会
- 佐藤信行（1975.3）：「本州における北大式遺跡の分布とその意義」『北海道考古学』第11輯 P.67～78
北海道考古学会
- 佐藤信行（1976.10）：「東北地方の後北式文化」『東北考古学の諸問題』 P.263～298 東北考古学会
- 佐藤信行（1976.12）：「瀬峰町内遺跡踏査短報」「郷土研究」第9号 P.30～32 瀬峰郷上研究会
- 佐藤信行（1980.3）：「がんげつ遺跡－第2次発掘調査報告書－」『瀬峰町文化財調査報告書』第3集 P.1～49
瀬峰町教育委員会
- 佐藤信行（1984.3）：「昭和58年度瀬峰町文化財パトロール事業報告」「瀬峰町の文化財」第3集 P.1～5
瀬峰町教育委員会
- 鈴木玄雄（1922.12）：「古碑」「美原郡藤里村誌」上巻 P.208～215
- 須藤隆（1984.3）：「北上川流域における晚期前葉の繩文土器」「考古学雑誌」第69巻第3号 P.1～51
日本考古学会
- 石器文化講話会（1983.4）：「宮城県岩出山町座敷乱木遺跡発掘調査報告書Ⅲ」 P.1～136
- 石器文化講話会（1984.5）：「古川市馬場塙A遺跡－発掘調査現地説明会資料－」 P.1～13
- 瀬峰町史編纂委員会（1966.3）：「瀬峰町史」 P.1～616 瀬峰町
- 坪井清足（1953.5）：「福島県天王山遺跡の茎生式土器－東日本弥生式文化の性格－」『史林』第36巻第1号
P.50～63 史学研究会
- 藤田定市（1951.1）：「天王山遺跡の調査報告」（上版） P.1～33 福島県白河農業高等学校歴史研究部
- 藤田定市（1951.10）：「天王山式土器の紋様図案」 P.1～20 福島県白河農業高等学校歴史研究部
- 橋田照（1966.3）：「宮城県瀬峰町の古代遺跡について」『瀬峰町史』 P.551～559 瀬峰町
- 宮城県教育委員会（1972.3）：「東北新幹線関係遺跡分布調査報告書」「宮城県文化財調査報告書」第27集
P.1～44
- 宮城県教育委員会（1975.3）：「十三塚遺跡－宮城県文化財発掘調査報告－」「宮城県文化財調査報告書」
第40集 P.157～162
- 宮城県教育委員会（1981.2）：「宮城県遺跡地名表」「宮城県文化財調査報告書」第73集 P.1～616
- 三宅・佐藤ほか（1977.3）：「がんげつ遺跡－平安時代の竪穴遺構－」「瀬峰町文化財調査報告書」第1集
P.1～83 瀬峰町教育委員会

図版 1 岩石1遺跡と周辺の遺跡（航空写真）





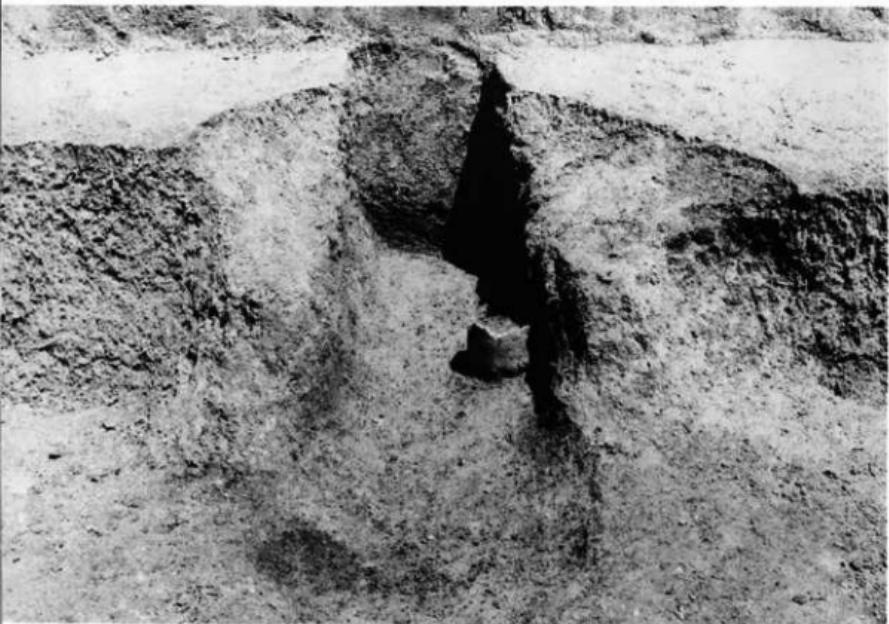
岩石 I 遺跡第 3 次発掘調査地区遠景



図版 2 岩石 I 遺跡第 3 次発掘調査地点(写真中央)近景



産みとして認められた発掘前のI号住居跡(写真中央)



図版3

I号住居跡カマド検出状況



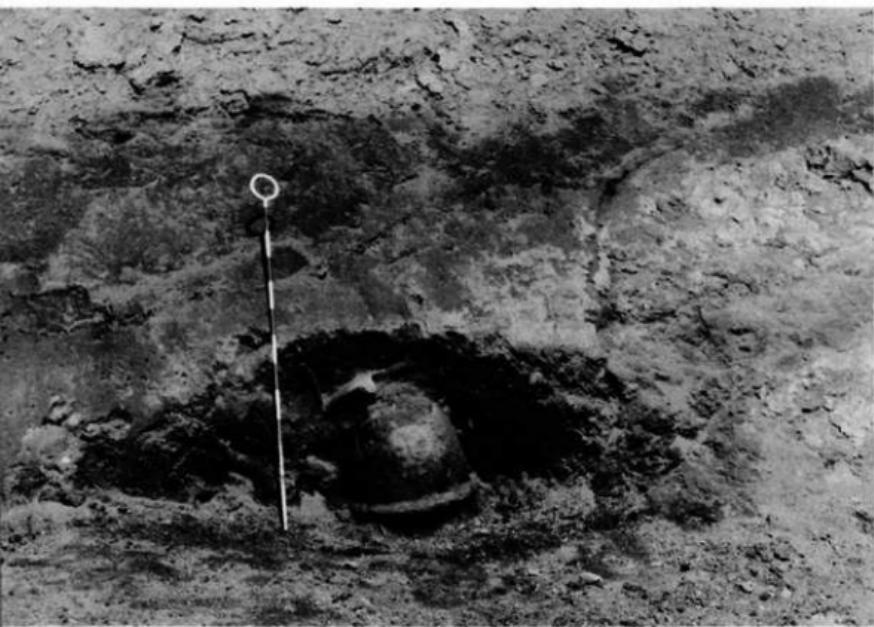
I号住居跡発掘状況



図版4 積穴住居跡断面(I号住居跡西方84mの地点)



豊穴住居跡断面（I号住居跡西方142mの地点）



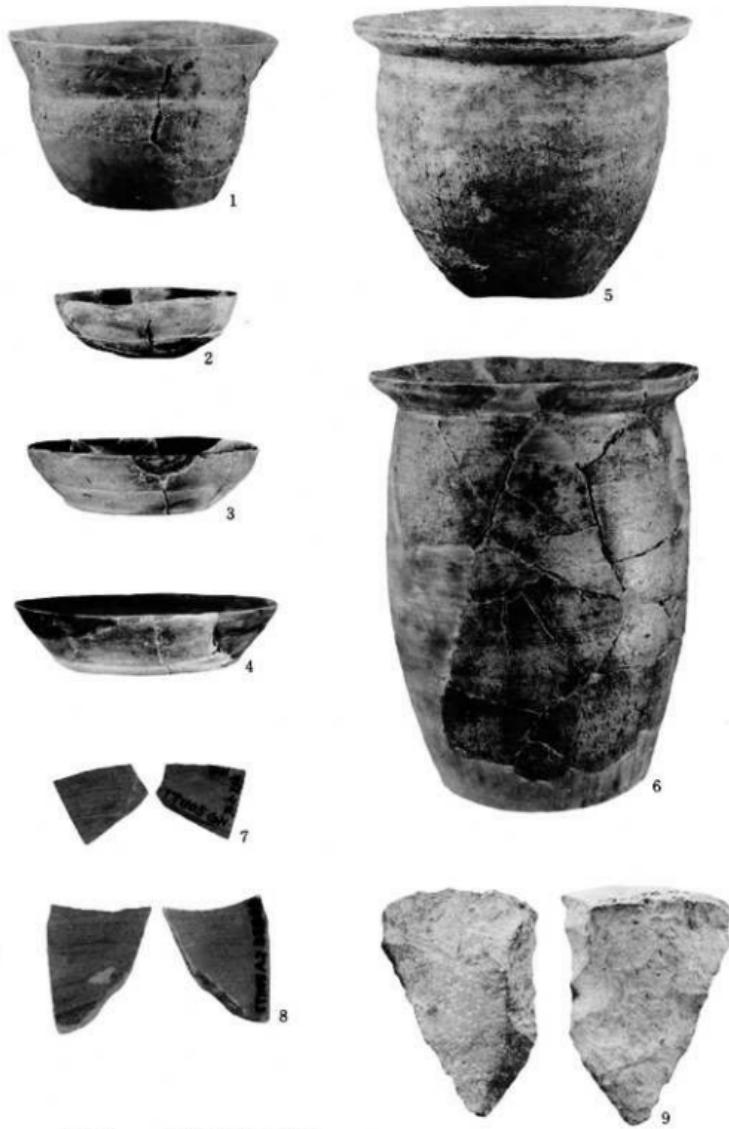
図版5 豊穴住居跡遺物出土状況（I号住居跡西方142mの地点）



図版 5 穴住居跡断面(1号住居跡西方194mの地点)



図版 6 小豈穴造構断面(1号住居跡西方106mの地点)



图版 7 岩石 I 遗迹出土遗物

瀬峰町文化財関係出版物

- 「瀬峰の史跡と伝承」昭和46年3月 P.1~28
「瀬峰町文化財調査報告書」第1集「がんげつ遺跡」昭和52年3月 P.1~83
「瀬峰町文化財調査報告書」第2集「長者原II遺跡」昭和54年3月 P.1~49
「瀬峰町文化財調査報告書」第3集「がんげつ遺跡(第2次調査)」昭和55年3月 P.1~49
「瀬峰町の文化財」第1集 昭和57年3月 P.1~13
「瀬峰町文化財調査報告書」第4集 「大澳山遺跡」昭和68年3月 P.1~442
「瀬峰町の文化財」第2集 昭和58年3月 P.1~15
「瀬峰町の文化財」第3集 昭和59年3月 P.1~35
「瀬峰町文化財調査報告書」第5集 「がんげつ遺跡(第3次調査)」昭和60年3月 P.1~35
「瀬峰町の文化財」第4集 昭和60年3月 P.1~57

瀬峰町文化財調査報告書 第5集

がんげつ遺跡

第3次発掘調査報告書

昭和60年3月27日 印刷

昭和60年3月30日 発行

発行 瀬峰町教育委員会

〒889-45 宮城県石巻郡瀬峰町瀬峰字下田山32-1

T E L 0228-38-2172

印刷 南部墨印刷株式会社

〒987-22 宮城県柴田郡多賀町高田・J U7-36

T E L 0228-22-2131

